

新潟県知事賞

幸せを運ぶヒーロー

佐渡市立河崎小学校

五年 菊池 諒

ぼくは、五才のころから募金をしています。ぼくが最初に募金箱を見たのは、スーパーのレジの横でした。お金が入った「なぞの箱」を見つけました。貯金箱なのかなとも思いました。

その正体を知りたくて、お母さんに聞きました。お母さんは募金のことと人助けになることを教えてくれました。そのころアニメのヒーローにあこがれていたぼくは、だれかを助けるということがヒーローみたいでカッコいいと思いました。ぼくは、一人でも助けられるのなら助けたいと思いました。それが、募金を続けている理由です。

ぼくは、募金がどういう風に使われているのか考えました。そして、社会福祉協議会の人に聞いてみました。そしたら、募金はくらしていくのに助けが必要な人たちのお手伝いに使われていると分かりました。あと、募金の使い道がホームページに書いてあると知って調べてみました。

ホームページを見ると、ぼくの地域でも助成を受けていることが分かり、びっくりしました。それは、桜の家という施設です。桜の家は、地域の人とふれ合えて交流ができる場所です。

桜の家では、いろいろな世代の人と話ができ楽しいです。学校ではあまりしゃべったことのない友達とも話すようになって仲良くなれました。その子の友達とも仲良くなって、他の学年の友達も増えました。あと、近所の人には第二のお母さんみたいで、やさしく接してくれます。桜の家ではラジオ体操をしていて、その後いつもココアをもらいます。ぼくが保育園児だったころ、ちゃんとお礼を言うことを教えてくれました。他にも社会のルールをいつも教えてくれます。

地域はぼくを育ててくれる場所で、家みたいな場所です。ぼくは、この地域が大好きです。そう思えるのも桜の家があるからだと思います。

募金は、高れい者や障がい者やしん災にあった人のためだけに使われると思っていました。ぼくの身近に使われていたと知って、おどろきました。それに、ぼくは募金をする側だと思っていましたが、ぼくにも使われていたと知りました。募金をして、だれかを助けているつもりだったけれど、自分も助けてもら

っていたと知って、募金は助け合いだと分かりました。募金は、自分にも返ってくるものだったのです。

　　ぼくは最初、募金箱のことを「なぞの箱」だと思っていたけれど、本当はみんなに幸せを平等に運んでくれる「魔法の箱」だったのです。これからも積極的に「魔法の箱」に募金をして、ヒーローみたいに世界中の人を助けたいです。

新潟県教育委員会教育長賞

しょうがいがある人の力になりたい

糸魚川市立糸魚川小学校

三年 関原 暖

わたしのしょう来のゆめは、しょうがいのある人とかかわる仕事をする事です。きっかけは、ほいく園のときにA君というしょうがいがある友だちがいたことです。A君は、車いすに乗っていたけどいろいろなことにちょうせんしていました。そのすがたを見て毎日おうえんしたくなりました。それとA君は手をたたいて「ちょいちょいちょいちょい。」と近づいていくとすごくわらってくれました。わたしはとともうれしかったです。

わたしはよく、バリバラとハートネットテレビを見ます。体をうまく動かせない人や上手に言葉を話せない人がいます。そういう人たちは、手つだってもらいながら自分なりの方ほうで動いたりつたえたりしてがんばっていました。がんばっているすがたを見ると、わたしもそばでおうえんしたいなと思うようになりました。

買い物に行ったときにすてきなイヤリングを見つけました。お店の人がそれを作った人のことを教えてくれました。病気になって自由に動けなくなり、車いすで生活しているそうです。せめて耳元でおしゃれを、と考えて、イヤリングなどのアクセサリを作っているそうです。お姉さんは、レバーのついた車いすで自由に動いて、うれしそうでした。きっと自分の力で動けるのはさ高い高なんだろうなと思いました。病気やしょうがいに負けていない明るいお姉さんでした。

だれかのために何かをすることは、あい手の力になるだけではなく、自分の幸せにもなるのだと思います。わらってくれたり、ありがとうと言われたりするととてもうれしいからです。そして、がんばっているすがたからわたしもがんばろうという気もちになります。

わたしの学校は、ひすいの里そう合学校が同じたて物の中にあります。こういう学校は、新がた県で二つしかないそうです。

二学期、A君がいるひすいの里そう合学校のみennaとたくさん活動したいです。もっとその子たちのことを知りたいです。そしていっしょにわらいたいです。

しょうがいがある人が他の人の力をかりながら気持ちよく生活できる社会になるといいです。

NHK新潟放送局長賞

小さな手助けは誰かの幸せの種

新潟大学附属新潟中学校

三年 板垣陽菜

楽しみにしていた中学校生活最後の体育祭当日、私は病院のベットの上にあった。体に異変がおき入院したのだ。数日前に足首に痛みを感じた。その痛みは日によって場所や強さが変わっていった。その間病院をいくつか受診したが、なかなか病名がはっきりしなかった。三つ目の病院で大きな病院を紹介してもらい、私は入院した。病名は若年性突発性関節炎。入院した頃には体のあちこちが痛くなり歩けなくなっていた。ご飯も一人では食べられなくなった。それまでの当たり前毎日の毎日が消えた。何で体育祭の日に、何で受験がある今年に、何で私ばかり……悲しみと不安と苛立ちの混じった真っ黒い気持ちで心の中がいっぱいになった。

しかしそんな毎日の中で、私はたくさんの優しさもらった。担任の先生は授業のフォローをしてくださったり、不安なことの相談にのってくださったりした。友達やクラスみんなは手紙や千羽鶴をくれた。病院の先生や看護師さんなどここに書ききれない程多くの人に助けてもらった。みんなの優しさは自分ばかり不幸だとくさっていた私の心を白くきれいにしてくれた。

たくさん受けた優しさの中で、私の心を大きく変えたものがある。それは病院の先生のお話だ。私は将来医学の道に進みたいと思っている。そこで主治医の先生に、自分の夢を抱いた時の話を伺ってみた。先生はとてもお忙しいのに、診察とは関係ない私の質問に温かく答えてくださった。

「目の前にいる、困っている患者さんを助けたいと思った。」

「副作用に苦しんでいた人を、新しくできた副作用の少ない薬を使って助けたいと思った。」

そのお話は私の価値観を一変させた。私は今までこんな風に人を助けたいと思ったことがあっただろうか。私はいつも自分のことばかり考えていた。そんな自分が恥ずかしくなった。先生のような温かい人になりたい。人を助けられる人になりたい。そう強く思うようになった。それからは目にするものも違って見えるようになった。入院中、私より小さな子が病気と闘っている姿をたくさん見た。今までは切ない気持ちを抱いただけだったが、自分もいつかこの子たちの役に立てるような人間になりたい。そのためには今できることを頑張ろう

と前向きな気持ちを抱くようになった。私はそれまで病気の研究をする基礎医学研究者になりたいと思っていたが、こんな風に直接人と関って助けができる臨床の世界に入りたいと思うようになった。自分の幸せより、人の幸せのためと思ったら何故か今までの何倍もの力がわいてきた。今は退院できたが病気を抱えた私にとって、夢への道はかなり厳しいと思うけれど必ず夢を実現したい。みんなにたくさん助けてもらった恩返しをするために、そして将来の患者さんのために。先生の話は私に大きな力をくれた。

病気になったのは悔しいし、辛い。でもおかげで私は小さな手助けが大きな力になることを知った。だから私も小さなことでもいいから日々気づいた手助けをしよう。世の中には助けを必要とする人がたくさんいる。みんなの小さな手助けが、きっと誰かの幸せの種になる。私がしてもらったように、私もたくさんの人に幸せの種を渡したい。

新潟日報社長賞

福祉のこころ

妙高市立新井中学校

三年 藤 田 柚

私は中学一年生から妙高市で祖父母と母と一緒に暮らしている。小学校までは東京で父と母との三人暮らしをしていたのだが、祖父母が高齢により今まで通りの二人暮らしが難しいということで東京から私と母がこの妙高市に移り住むことになった。

私たちがここに越してきた第一の理由として祖父が要介護五と診断されたことが挙げられる。ほんの数年前まで元気に歩いていた祖父も、私たちが越してきた頃には寝たきり状態で自分で寝返りもうてないほどだった。そして祖母も数年前と打ってかわってとても疲れた表情をしていた。そして、元々あった難聴がさらに悪化していた。その時私は、自分の目の前にいる老夫婦が自分の祖父母だとは思えなかった。私が覚えている祖父母はいつも笑顔で私に優しくしてくれた。特に祖父はほんの些細なことでニコニコと笑うので、目尻に笑った時にできるしわが刻まれていたのに、その時の祖父は、もうそのしわが無かった。大好きだった祖父母の変貌ぶりに私は驚いた。それと同時に「大好き」という感情も消え失せた。

その日から私はなんとなくだが祖父母を避けるようになった。祖父は大抵寝ているので話す機会はないが、よく話しかけてくる祖母には「あー」や「うん」など軽く返事をして無視するようになった。同居生活への不満にも応えないので日を追うごとに関係は悪化していった。いつしか祖父母も話しかけてこなくなった。私の大好きな祖父母はもうどこにもいないと思うと、とても悲しかった。それと同時に、大好きだった祖父母に素っ気ない態度をとる自分に腹が立った。

二年生の春、祖父が近所の老人ホームに入居することになった。私は正直、祖父のおむつ替えの臭いがいやだったので少しか嬉しかった。それに老人ホームは家から百メートルもないので、いつでも顔を見に行けるという安心感もあった。「またね」とお互いに言って、祖父は我が家から離れていった。

しかし、祖父が入居したその日の、「またね」という言葉が祖父と私の最後の会話だった。祖父はその年の秋、肺炎で亡くなってしまった。八十三歳だった。

お通夜とお葬式の時、五年ぶりにいところに会った。いところは介護・保育に携わる仕事をしている。いところは、その経験を生かして祖母の歩行やその他様々なことを補助、介護していた。その時祖母は笑っていた。私が好きだったあの笑顔で。私はいつもに増して暗かった祖母が笑ってくれたことがとても嬉しかった。その時になって私はようやく理解した。自分の言動一つ一つで笑顔は作れるんだと。同時に今まで祖父母に冷たい態度をとっていたなと後悔も生まれた。大好きな祖父母がうばわれたのではなくて、私がうばったのだ。

その日から私は祖父母に優しく接することができるようになった。私がいとこの姿を見て考えを改めたように、介護や保育では誰かが率先して福祉の心を持つことで、周りにも福祉の心を与えたり、被介護者への考えを改めることができるはずだ。そのために私は、いところを見習って、介護・福祉について知り、周りの人に福祉の心を与えたいと思い実践をしている。大好きな人たちの笑顔を見るために。

新潟県社会福祉協議会長賞

障害に対する壁を無くそう

新潟県立直江津中等教育学校

二年 ^{たか} ^{はし} ^あ ^お
高 橋 碧 生

みなさんは「発達障害」について何か知っていることはあるだろうか。視覚障害や聴覚障害はテレビ番組等で取り上げられていることが多いが、発達障害はそれが少ないと思う。私は多くの人に発達障害についての理解を深めてほしいと感じている。

なぜなら、私の弟は「自閉症スペクトラム」という発達障害者であることで、周りの人に理解されず苦しい思いをしているからだ。何が周りに理解されていないのかを具体的にあげるとすると、コミュニケーションを取ることが苦手である所や、自分の気持ちを上手に言葉に表すことが難しい所などである。

私の弟は、人と関わるのが苦手なことを理由に、人から白い目で見られたり、影口を立てられたりしている。「この子ちょっと変だな」「大変そうだね」というような言葉を何度も何度も聞いてきた。

私はこのように発達障害者を差別するような捉えをしないでほしいと感じている。発達障害を持っていたとしても同じ人間である。趣味や好きな食べ物もあるし、話してみると楽しいのだ。発達障害の弟と一緒に暮らしていることで、嬉しかったことや楽しかったことがたくさんある。

「障害をもっているから自分とは違う」と心の中で感じている人は少なくはないと思う。しかし、その考えは単なる決めつけであるのだ。障害者に関わることに勇気があるが、関わりをもとうとすることも大事である。

発達障害者は日本で約三万九千人。私の弟のように周りに理解されていない人はたくさんいる。もし何処かで発達障害の人を見かけたら、「変なやつ」だと思わず、優しい目で見守ってほしい。何か困っていたら助けてあげてほしい。発達障害の人々がよりよい暮らしをおくれるように、発達障害についての知識をたくわえてほしい。

私の弟は市内の特別支援学校に通っているのだが、そこでは発達障害についてたくさん学んだり、発達障害者とたくさん関ったりすることができる。文化祭では、発達障害をもった中高生が作ったお菓子やグッズなどが販売され、とても楽しい思い出を作ることができる。このように、障害者に関わることのできる行事があるのだ。障害者に関わることのできるボランティア活動も多く実

施されているため、身近に実施されていることを知ったら、是非参加してみてもはどうだろうか。私は多くの障害をもつ方と関わることで、障害について多く知ることができた。

このように、障害者について理解を深める機会はたくさんあるのだ。障害者と関わることでたくさんのことを学べる。理解を深めれば深めるほどおもしろい。

障害者と私たちが共に楽しく暮らせるために、自分ごととして捉えて行動にうつしてみてほしいと感じる。

新潟県共同募金会長賞

おうちぼうさいキャンプたいけんき

上越市立八千浦小学校

二年 水 澤 諒 介

さいがいがおこって、家ぞくとはなればなれになってしまったり、家がこわされたらすごくこわいなおもいます。そんな時、ぼうさいの本を見つけ、学んだことをいかしたくて、「おうちぼうさいキャンプ」を計画しました。

その日、いつものように家でゲームをしていたら、おかあさんからじしんのアナウンスがあって、むねがドキッとしました。いそいでヘルメットをかぶって、げんかんのはしでだんごむしポーズになってうずくまり、じっとしていました。ゆれて、ものがおちてきたらどうしようとおもい、少しこわかったです。じしんがおさまったと言われたので、家にあるぼうさい用ひんをかくにんしました。かんいトイレ、ひじょうしょく、水、たくじょうコンロ、ライトなどいろいろあったので、あん心しました。

それから、かい中でんとうの上にポリぶくろをかぶせてしゅういを明るくしました。かい中でんとうをやわらかな光にするうらワザです。これは、本で学んですごいなおもってじっさいにやってみました。

つぎに、たくじょうコンロを出しておゆをわかしてカップラーメンをたべました。さいがいにあった時は、これだけのしょくりょうでもしあわせだなおもいました。夜ごはんがおわった後は、でんきをつけずに、くらい中おふろに入りました。ランプをおふろの前において、いざ入ると、とてもくらくてびっくりしました。体をあらっている時は、くらくてよくみえづらいなおもいました。

じっさいのさいがいでは、でん気が一週間、水道が一ヵ月、ガスは二ヵ月もふっきゅうまで時間がかかるかもしれないと本に書いてありました。これからは、ふだんでもでん気や水道、ガスなどもっとたいせつにしたいです。

「いつもあるあたり前はあたり前のことではない」

これは、ようちえんにかよっていた時に、先生から教えてもらったことばです。今回の「おうちぼうさいキャンプ」をけいけんしたことで、そのことばは本当なんだなおもいました。

これからも、おとうさんやおかあさんにもらったいのちをだいじにしながら、いろいろなことにかんしゃしてすごしていきたいです。